

カナメモチの「ごま色斑点病」と「ペスタロチア病」

以前、病害診断実習教材として、防除室だより Vol. 54 で「アジサイ葉の病斑」を紹介しましたが、もう一つの教材としてカナメモチ葉の病斑があります。病斑部に押し当てたセロハンテープをスライドグラスに貼り付けて顕微鏡で観察すると、特徴的な形態の分生子が容易に確認できます。

1. カナメモチごま色斑点病



葉に、黒褐色円形、ゴマ粒状の斑点を多数生じます。カナメモチでは病斑周囲が紅色を帯びてくるのも特徴です。

エントモスポリウム (*Entomo* 昆虫 *sporium* 胞子) という菌で、虫のような分生子ですが、「ハツカネズミ型」とたとえられることもあります。

バラ科サクラ亜科ナシ連の樹木に発生する病害で、リンゴ、ナシ、セイヨウナシ、ビワ、カリン、マルメロ、サンザシ等の農作物も侵します。

2. カナメモチペスタロチア病



葉に、褐色の縁取りを有する灰白色、円形の小病斑を生じます。

分生子は「毛が三本」頂部に 3 本の付属糸を有する特徴的な形態です。分生子頂部の 3 本の付属糸を有する細胞と、基部の細胞は無色で、分生子が乾燥すると見えにくくなり、中央部の褐色の 3 細胞だけが目立って、ひしゃげた樽状に見えることがあるので、要注意です。

様々な植物の「ペスタロチア病」の病原菌名にはペスタロチア属（分生子は 6 細胞）とペスタロチオプシス属（分生子は 5 細胞）が混在していますが、これは 5 細胞なのでペスタロチオプシス属とすべきものです（オプシスはモドキの意）。ペスタロチオプシス属にはリンゴ、クリ、キウイフルーツのペスタロチア病の病原菌も含まれています。



カナメモチは、ちょうど今、赤い新芽が目立つため、どこに植えられているのか、容易に見つけることができます。